

米合 二石九斗二合八勺

俵ノ七俵一斗二升二合八勺

銀 三匁三分四厘

右之通相違無御座候 以上

宝曆八戊寅年八月

前書之通御届候也

則日

飯塚 名兵衛

加藤 八右工門

赤石 藤馬

栗原 十兵衛

ひらり合分
 一、上田 三石六斗一升七合
 一、下田 一石九斗七升八合
 一、上田 四石二斗
 一、下田 三石六斗一升七合
 一、上田 三石六斗一升七合
 一、下田 一石九斗七升八合
 一、上田 四石二斗
 一、下田 三石六斗一升七合

知
 一、上田 三石六斗一升七合
 一、下田 一石九斗七升八合
 一、上田 四石二斗
 一、下田 三石六斗一升七合
 一、上田 三石六斗一升七合
 一、下田 一石九斗七升八合
 一、上田 四石二斗
 一、下田 三石六斗一升七合

宝曆八戊寅年

金木組小栗崎村田畑高反別帳

八月 百姓 新三郎

萩元

一、下田 一畝六步

分米六升

同所

一、下田 一畝二十四步

分米九升

同所

一、下田 五反八畝步

分米四石六升

同所

一、下田 三畝二十步

分米二斗五升七合

同所

一、下田 四反五畝十三步

分米三石一斗八升五合

新三郎

同人

同人

同人

同人

同所八反六畝二十步ノ内外八

一、下田 一反九畝十七步

分米九斗七升八合

同所

一、下田 五反一畝二十步

分米三石六斗一升七合

同所

一、上田三畝十五步 同人

分米三斗八升五合

同所

一、上田四畝十二步

分米四斗八升四合

同所

一、上田 一畝一步

分米 一斗一升四合

同所

一、下田一反九畝二十二步

分米九斗八升七合

同人

同人

同所九反一畝十七步ノ内

一、下田 四反三畝六步

分米三石二升四合

端山崎

一、上畑 六畝二十八步

分米四斗一升六合

田方 二町五反三畝六步

分米十七石二斗三升六合

内

上田 八畝二十八步

分米九斗八升三合

下田 二町一畝二十九步

分米十四石六斗三升八合

下田 四反二畝九步

分米二石一斗一升五合

上畑 六畝二十八步

分米四斗一升六合

田畑合 二町五反八畝四步

分米十七石六斗五升二合

成米十四石五斗四升九合六勺

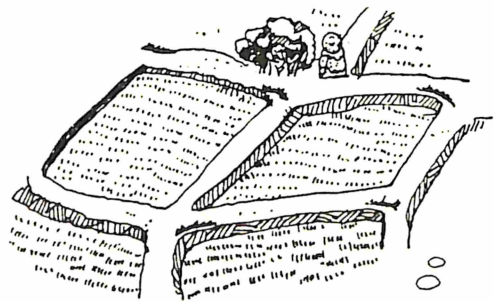
小役米七斗三升二合四勺

久兵衛作

同人

清次郎作

同人



米合 十三石二斗八升八合二勺

俵

二十八俵八升八合二勺

銀 十二匁三分六厘

右之通相違無御座候 以上

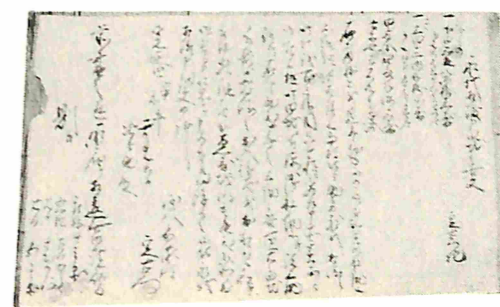
宝歴八戊寅年八月

飯塚 名兵衛

加藤 八右工門

前書之届候也

則日 赤石藤馬 栗原十兵衛



宝歴八戊寅年

金木組中柏木村畑方高反別帳

八月 作人 作兵衛

よろい石分高

一、下々田 三畝十歩

分米三升三合

成米一升六合五勺

小役米一合二勺

米合 一升七合七勺

一、銀二匁

右之通相違無御座候以上

宝歴八戊寅年八月

飯塚 名兵衛

田位は、上々、上、中、下、下々田の五等に分けられる。

(1) 村位、田位の等級表

| 田位 | 村位 | | 中村 | | 下村 | |
|-----|-------------|---------------|-------------|---------------|-------------|---------------|
| | 上 | 村 | 中 | 村 | 下 | 村 |
| 上々田 | 石斗升 一、四〇 | 斗升合勺 八、九八二 | 石斗升 一、三〇 | 斗升合勺 八、三四〇 | 石斗升 一、一〇 | 斗升合勺 七、〇五七 |
| 上田 | 一、三〇 | 八、三四〇 | 一、二〇 | 七、六九九 | 一、一〇 | 七、〇五七 |
| 中田 | 一、一〇 | 七、三四〇 | 一、〇〇 | 六、四二六 | 一、一〇 | 五、七七〇 |
| 下田 | 〇、九〇 | 五、七七〇 | 〇、八〇 | 五、一三三 | 〇、七〇 | 四、四九一 |
| 下々田 | 〇、七〇 | 四、四九一 | 〇、六〇 | 三、八五〇 | 〇、五〇 | 三、二〇八 |

備考

一、分米とは、公認生産高、即ち年貢米の対象となる收穫高。

一、成米とは、收穫米、即ち年貢となる米高のこと(本税)

一、嘉瀬村、小栗崎村、中柏木村は下村に入る。

(2) 畑の等級

村位にかかわらずその收穫高を米に換算して等級を定め、その高に応じて収納せしめる。

上畑一反歩高六斗、中畑五斗、下畑三斗、下々畑一斗、屋敷八斗。

(3) 小役米

年貢米(本税)六公四民(六割を貢納して四割の保有)の外に、小物成(附加税)として次のようなものがあった。

イ、山手米 山林から柴薪を伐採するのにたいして高十石に米五升納

嘉瀬 八右工門

前書之通御届候也

則日

赤石藤馬

栗原十兵衛

生産高と年貢末

反別帳から、津軽藩政が、百姓に対しいかに重い年貢を(税金)を課していたかを知ることができる。

嘉瀬村の村位は下村で、田位も上田の生産高(分米という)は反当り二俵三斗で、その年貢(成米という)は一俵三斗五合七勺であった。

嘉瀬村は、下々田が多くその生産高は一俵一斗で、年貢は三斗二升八勺が収納せられた。即ち六割以上が年貢米であった。

史実によっても明白だが、百姓は衣・食・住さえ規定され、貧苦のどん底に置かれた。牛馬のごとく働き生産した米は七割近く年貢米として納めさせられ、公役に使われてもほんの申訳的な労賃で、少しの不満、抵抗も許されず、離農や田の売却は禁じられ、逃亡すると死罪、水牢が待っていた。役目を果たすために目をおう呵責に耐え、涙と汗の当時の百姓の姿が、平成時代の今日、幻影となってよみがえる。

◇百姓の年貢米

百姓の年貢は、村位、田位による石盛の六つ成(六割)、畑は五つ成(五割)が定則であった。即ち村位は、上、中、下村の三等に区分し、

める。

ロ、野手米 山野から採草にたいして、高十石に米四升納める。

ハ、夫米 百姓から人夫として藩の御用働きをする代わり、代米として高十石につき米五升納める。

ニ、津出米 青森、鰯ヶ沢への収納米の駄送賃として、十石につき、米一斗六升納める。

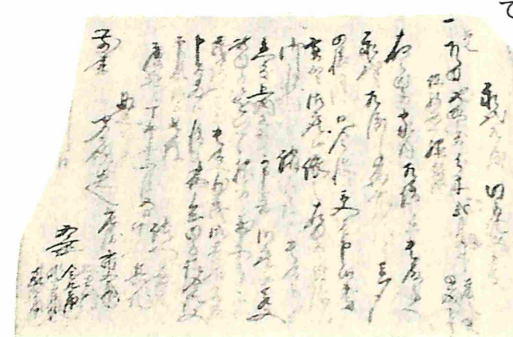
ホ、口米 収納米の減石補給料(足し米)として十石に対し、三斗納める。

この五種が基本で、計四斗一升六合になる。このほかに金納による雑税があった。

高懸銀 堤防、橋、溜池等の営繕費として人夫賃を高十石について七匁目納める。

卯時代銭 藩馬の秣代として、幕府へ献上馬代、年三八貫目位。大々料 年、七貫目、内六分は藩主、四分百姓、五穀豊饒を伊勢大神宮への祈願の大々御神楽料として。

高(分米)十石につき六石(二五俵の生産高に対し、十五俵)の年貢米であった。これに附加税五口小役米、四斗一升六合を合わせると、六石四斗一升六合になる。即ち年貢米は、六、四一六の定法となる。



津軽の殿様へ小判一千両の貸金催促

— 東京電話 — 旧津軽藩主、津軽義孝伯(二二)並びにその後見人近衛文麿公の両氏は、市外千駄谷町二二二、工藤祐造氏から貸金七千九百三十一円二十銭の請求訴訟を十九日、東京地方裁判所へ提起された。

原告の言い分では、津軽伯の祖父承昭氏が、明治二年六月、廃藩置県から旧領地、弘前藩知事に任せられた時、お手許金不如意で、工藤氏の先々代が、ちょうど両替店を営んで、金のあるところから、小判(ばん)千両を借用し、翌三年中に年貢米で返済する約束をしたところが、その後、再々催促したが、津軽家では、そのうち、そのうちというのみで返済せず、やむなく当時の小判一千両を換えてみて、とりあえず、半分の前記金額の請求に及んだというのである。

(東奥日報 昭和2・11・20)

米作百万石超すか

本県米作第二回予想は、百十一万三千六百九十四石にして、第一回予想百十一万九千六百八十一石に比し、五千九百八十七石減じるが、主なる原因は、去る十月七、八日の暴風雨のため、水害をこうむりたるものなり。

被害の最も多かりしは北郡にして、第一回に比し五千四百二十二石減じ、これに次ぐは西郡にして二千二百七十七石減じたるが、反対に増加せるは、上北郡の三千五百八十八石および南郡の七十一石なり、第二回予想を昨年の実収高と比較すれば、十一万三千九百四十八石を増加する農作にて、平年作九十九万二千六百六十六石と比較すれば、十二万一千五百二十八石

を増加の見込み。

(東奥日報 大正9・11・14)

(注) この年の実収高は百九万余石、反当り一石七斗四升七合の大豊作となった。しかし、その半面、米価が暴落するなど農民に恐慌を与えた。

米価下落の対策に県農会が決議出す

本県農会長は米価暴落による農村の救済緊急なること、農村経済を永久安全ならしむる方法を講ずるの必要を認め、今回、道府県農会代表者協議会要項の実施を最も緊急なりとなし、本県選出貴衆院議員あてにて、右決議要項を政府に実施せしめらるるよう配慮ありたき旨、左のごとく依頼せり。

応急 策

- 一、政府に米の買い上げを実行せしむること。ただし、農家における庭相場の最低価格 を一石三十五円とし、数量は三百万石以上たること。
- 二、外米の輸入を極度に制限すること。
- 三、低利資金を融通せしむること。

恒久 策

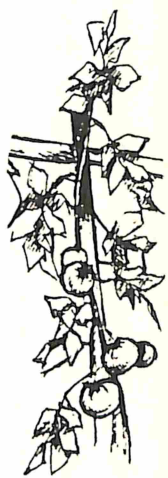
- 一、農業倉庫の普及を図らしむること。
- 二、常平倉の設定を促進すること。
- 三、米麦生産統計を正確ならしむる方法を講ずること。

付帯決議

- 以上、各項の遂行を期するため、各道府県最善の方法をもって
- 一、貴衆両議院の努力を求むること。
 - 二、宣伝を徹底ならしむること。

(東奥日報 大正9・12・20)

嘉瀬の風俗習慣



秋 元 惣 之 進

嘉瀬には、六〇才以上の老人が約七〇〇人おり、元気で老人クラブ(木村金利会長)に遊びに行き、又週一回月曜日に町の福祉バスが川倉温泉町中央老人福祉センターに送迎し、余生を楽しませてくれている。老人達は町の暖かいもてなしに長生きして、良かったと心から喜んでいる。

私もクラブや川倉温泉に厄介になっているが七〇代々八〇代の人々から嘉瀬に伝わる風俗、習慣、年中行事等の事を聞く機会が多かった。古い行事も時代の変化と共に次第に忘れ去られ、去歳の枯葉として彼方に追いやる事は承服しがたいが、先人の辿った足跡を年配者から聞き、つい最近迄命脈を保った風習と行事を旧暦の月順を追って私なりに綴って見る。

旧正月 昔は、嘉瀬、毘沙門、長富、中柏木の四つの集落で構成して明治二一年 約百年前 嘉瀬村となったが嘉瀬は戸数も一番多く、商店も沢山あり本村の嘉瀬に来ると一応は何でも用件を済ませることができた。年の暮れともなると嘉瀬の十文字には正月の詰ノ市が立ち並び色々な物が売られ近隣の集落からは正月用品を買いに来て大変賑やかだった。

商店では踏み堅めた雪の上に、寒いので炬燵を掛けて手を暖めながら商うが、特に人々が集まるのは魚屋の前だ。其の頃は鱈が沢山取れたので正月の肴として人気があり、買った人達は大きな鱈やカスベ(えい)鮫などの頭に縄を掛け、雪の上をずる引いて歩く姿はさすがに正月だなあとほほ笑ましく、年に一度の正月は楽しく過ごしたいのが人の気持ちであろう。

旧正の元日を大正月と呼び農家では一週間の休みである。十五日目は小正月だが俗に大正月は男の正月、小正月は女の正月といった。三十日は三年として三度の正月を祝った。

農家に取って正月の時期は農閑期と厳寒期で過重労働からの解放は子供の喜び以上に嬉しい。年越しの大晦日には鶏鳴に起き男達は尻を片付けワラを敷き、自在鍵を取り替えたり女はミザ(流し場)で正月料理の仕度に忙しい。

全部整うと神仏を拜んで気分を新たに皆んなで一緒に食膳に付き「過ぎし年の無事と来る年の幸せを祈り」新年を祝った。

正月の一日か二日にはシュウトマイリの為に新婚夫婦は里帰りをするが、嫁婿達はこの日を一日千秋の思いで指折り数えて待っているのだ。前夜から着飾る物を準備し、里帰り程嬉しい事は無い。普段の舅、姑に毎日の抑圧と気苦勞から解放され自由の身になるのだ。

実家へ行ったら朝寝坊してゆっくり手足コ伸ばして大きい口をあいて何んでも食べて来いよと言う。里帰りの嫁達の顔は解放感に輝いている。嫁の実家では親類縁者や知己などを招いて嫁婿をお祝いするが、招かれた人々はお返しに新婚夫婦を自分の家に呼んで御馳走をする正月料理は午ぼうのどんぶ、膾、煮しめ、鱈汁、鮫の焼魚、海鼠、カズノコ、蛸などを馳走する。

餅は正月の花形である。農家では財力に依り大晦日前に餅を搗くが干餅を入れると二俵も三俵も搗き、お供餅、切餅と餅は正月用のお客様のご馳走と子供のおやつである。干餅は色を入れ綺麗である。若者達は餅の喰べくらべをやり搗きたての餅を食べると言うより、飲込み一升位の餅をグイグイ呑んで早さの競争で後日胃を痛む人もある。正月は大人も子供も楽しい休日正月のお年玉を貰って嬉しそうに子供達の姿が微笑ましい。子供達は小袋を正月が来る前に祖母や母に縫って貰らい、友達に小袋を振って見せ銭コ幾等入っているか当て、見ると言ったものだったが、普段は垂ればなしの鼻汁も晴着を着ているので鼻をかめと言われているので鼻汁のあとを付けるひまが無い。鼻が垂れていると鼻の下が赤くなるので鼻火事とからかわれた。

正月には嘉瀬の十文字に立つ詰ノ市は勿論子供相手の店が立ち並び、クジ引きのオデン屋、鳥コ飴、生菓子の大福のクジ引きなど数軒が並んだ。子供達は貰ったお年玉でクジ引きや凧お面などを買い賑わった。お雨が降るとよく昔から言われ、寒九の雨が降ると其の年は水が豊富で稲作は豊作で心配は無いと喜び、寒中の雨は雨返しが無いと言う。この頃になると日ざしも明るさと暖さが増す。私達の子供の頃に雁の目潰しという言葉があった。このことは、雁が北へ飛去る頃に翼が横殴りに吹きつけ目隠しされた様に方向を失なう事である。寒が明けると節分、立春で野面は春の香りが目の前まで来ている。

昔、嘉瀬八幡宮にも、柳絡みがあったと言う。豊凶を占う行事で柳の大枝に御幣を付けて叩き付けると枝が飛び、枝のこぼれ具合によって占う。早く枝が落ちると早生稲が豊作で、中々枝が落ちないと晩生稲が良いが不作だと言う。又嘉瀬八幡宮境内に二十三夜堂があるが、旧暦一月、五月、十月の各二十三日が例祭日だが、一月二三日の晩に婆様達が講中をつくり仲間の家に集って山の端から登るお月様を拜んでお月様の登り具合を見てその年の豊凶を占うと言う。豊作の年はお月様が舟に乗って「ヘラ」を持って来るが不作の年は杓子を持って登る。

旧の一月、五月、九月の二四日曹洞宗の寺で大般若が行われ、祈禱日は盛んで嘉瀬からも善男善女が参詣したと言う、大般若のお守り札は化物や狐、狸等妖怪から身を護り無病息災を願ったと言う。一月二十三、二十四日に洪柿を食べると無病という風習があった。

男の厄年は二十五歳、四十二歳、女は十九歳、三十三歳が大厄という。大厄が掛っていると良い気がしない。昔は厄払いに便乗し祝い酒にありつこうと思う気持の人々があり、又大厄祝ひをやらないと嫌味を言われ無理してもやる。私が子供の頃に吉崎忠直さんの母や平井清さんの母などが厄払いをしたのを見たが、婆様連中が恵比寿、大黒様に花嫁、花婿衣裳でお白粉を塗り、酒樽を担ぎ女連中が並び、嫁入り行列を作り、

年玉で独楽を買って天気の良い日には男の子等は雪を固め独楽回しの競争をして負けた独楽を痛い程に打付けて独楽が割れる事もある。

小正月の十六日は女の正月と言いい女が主体であるが、旧正の十六日は地獄の釜の蓋も開くといい、女はゆっくり休んだ。仏壇には十六日にもんで十六個の握飯を造って箸を立て、「ケの汁」を必ず供えた。ケの汁は大根、人参、午ぼう、ワラビ、ゼンマイ、凍豆腐、油揚、昆布を入れて煮込んだ物で自然食として栄養価も高いと言う。又小正月の十五日には餅を拵いて神棚や仏壇に供えるが大底の農家では餅の中に、赤・黄色の各種の色を入れて餅を搗き、ピンポン玉位の大きさにちぎり取り、柳の枝に数十個つけて家の中に飾るが、柳の枝の餅は「稲穂の様に垂れ下がり」実が綺麗である。餅稲穂の様に豊作を祈ったと言う。

大家以外の農家は貧弱な家屋の造りであるから戸口に掛ムシロを下げ、家の中もムシロを敷いたというから農家の人々を掛ムシロ育ちと言いい、戸を閉めない人を掛ムシロ育ちだね、と笑ったという。

昔の農家の家は粗末な造りで入口が土間で突当りが作業場である。作業場は粘土質の土を踏み固めてこゝで藁を織り、米俵を編み、脱穀や米搗きをやったが、左側が厩で右が居間で、鶏を飼っている家などは居間も寝床も鶏が歩いて糞を垂れ、人も馬も鶏も一緒に暮らしている様さまであったと言う、昔の農家の人々は浅学文盲だったから衛生観念に欠け、迷信に走りやすかった。正月の月明りに自分の影に首がうつらないとその年に死ぬとされ、早朝に烏が屋根にとまると不幸がおこる。大風が強い時には鎌を大風の方向に向け屋根に刺すと大風が止む、などいろいろな迷信を真剣に信じた。旧正も過ぎる頃になると寒さが次第に緩んで、小寒の氷、大寒に解くというが、寒三寒九この頃になると大底

飲めや唄えの大騒ぎ。この風俗習慣は次第に消えつゝあり、今は交通地獄に絡み、主に神社で共同厄除け祈禱を行っている。

三年近くになると農家では田圃に堆肥運びをするのが完熟した堆肥を朝早くから藁に包んで粒肥にするが粒肥は藁で覆っているので雨や雪が降っても成分が逃げない。又、田圃に洪水が来ても流れにくいと言う。堆肥の粒肥作業は堆肥の下に藁を敷き其の上に堆肥を入れ藁で結んで一丸の粒肥にするが重労働で若い衆が早朝から裸で汗を流して頑張っても一日に百丸が精一杯である。又、散肥で運ぶ人もあるが洪水が来ると流れる恐れがあり風雪で成分が流亡する。

粒肥丸きは大抵五、六人で仕事をやるから二、三日で終るが何十何百丸もの数であるから自分の屋敷一杯に並べられる。堅雪になると人糞で田圃に運ぶのを肥曳と言った。昔は馬が少なく人糞に積んで曳いて配ったが、午后になると雪が解け糞の滑りが滑くなると汗で濡れ疲れた。又、馬糞で堆肥運びをする家もあったが馬ざくら(馬や糞の跡の深い雪穴)ができ、地吹雪などで苦勞した。

堆肥運びが終って春近くなると農家は忙しくなるので、あちらこちらから飯米を搗く音が聞こえてくる。作業場の土間に臼を据えて米搗き杵の音が響えてくると春を呼ぶ感じがしたが大正末期頃から精米所が出来て精米所で搗精をするようになった。

やがて彼岸である。彼岸は現世に対し仏の世界を言い、現世に極楽浄土、人間の迷いと往生を願う清浄な心にととえていると言うが、春分の日に真東から太陽が真西に落ちるので日没を觀想し仏の浄土としたという。春、秋の彼岸に先祖を供養するのは古くからだが「暑さ寒さも彼岸迄」彼岸の団子は白、蓬、黍とあり、青い蓬団子は春の感じがし

て美味しく食べられる。食べ残して固くなった団子を翌日焼いて食べるのも美味しい。彼岸の中日後には農家では種蒔し、種蒔きの準備をする。

種池に雪を切って穴を開け三週間位漬けるが昔は大底子（ね）の日を選んで種浸けをした。鼠の様に、種が沢山育つようにとの縁起からだという。

この頃には、婆様達は村の百万遍や地藏堂などを回り、鉦を叩きながら村から悪魔退散、家内安全、今年も豊作である様にと熱心にお祈りして回る姿が見受けられる。又、この時節には節句がある。節句は主に村の地主や主立の家に子供があると行われた。吾が子の行く末を寿く意味があり、子供に晴着を着せ、甘酒や白酒を造り蓬餅をこしらえたり、桃の花はまだ早いので桃の枝や猫柳の枝を切って徳利に刺して祝ったが、一般の農家の一部でも隣り知らずの「ボタ餅コ」を造り祝う人もあった。ボタ餅をこしらえたのは杵の音が立たなく隣り近所に回さなくても良

いからだ云われ、吾が子の成長を祝う家もあった。昔は苗代に水が一杯溜めてあったので降雪期には雪が固まり、厳寒期に入ると氷になるが、まだ氷が解けぬ春先に苗代一面が「ビンジャヤー」（スケート）場と化した。昔の「ビンジャヤー」は木製の下駄の格好した形の下に細い鉄の棒を付けた先端（鼻先）が渦巻きに、ぐるぐる曲った不格好な形で、足袋を履いて滑ったもので、天気の良い日には子供達が「ビンツヤヤー」大会を開いて楽しんだ。

節句が過ぎると雪解けが早まり、雪解けの小堰の水を利用して子供達は桎で小さな水車を造り、流れ水の勢いを利用して「クルクル」回る水車を回し、誰のが一番回転が早いか競争した。

この時節には苗代一面は雪解け水で一杯で、苗代を良く気を付けて見るとそこ、に小さな一・五ミリ位の穴が有り其の穴を鍬で掘って見ると其の年の豊凶を占うのであった。

昭和初期迄は「鯨」の山が築かれる程に大漁が続いたと言う。其の為に嘉瀬からも漁夫として「雇い」売りが出た。今の出稼で漁場は北海道や千島、カムチャッカなどである。

漁期が近づくと集団で渡道したが、板子一枚下地獄で海の荒仕事は危険が伴うが苦しい生活の農民は出稼ぎに行く外はどうにもならなかった。仕度金として前借金を借りるが諸々の借金を払い家族の生活費に当ると一銭も残らない。苦しい農民生活が出稼に追えやるのだ。

雪が消えると農家は忙しくなる。苗代づくり、種蒔き、堰掘り、田打ち、畑仕事と目が回る程の忙しさ。田打ちの時節には色々な花が咲き野づら一面に陽炎（かげろう）が立ち登る。昔は三本鍬で営々と田圃を耕起し、鍬で田掻きをしたが大正末期から馬耕が入り大半は馬耕になった。

寒中に搗いた干餅は田打ちの頃に軒下から降され歯ざわりが良く農繁期の間に最高である。

旧四月八日（太陽暦五月十二日頃）はお釈迦様（降誕）の日であり葉師神社祭である。小栗崎（嘉瀬）では祭りに合わせ競馬を催し楽しんだと言うが、競馬場は今の東町である。古老の話では、騎手は赤、青、黄など色とりどりの襦袢を付け、紅白の罌頭笠を冠り、颯爽とした勇姿で走る行事で近郷近在から見物人が詰めかけ大変な賑わいであったと言う。

四月八日が終ると農家は田打ち、田掻き、代掻きと重労働が続いて田植えの準備だ。昔は八十八夜前後に初時きをして三十三日目頃から田植えをしたが、「入梅の露にあたって植える」と言われた。昔は「苗付け馬と稲付け馬が行き逢う」と言われる程に田植えが、遅れた。田植えは親類や隣近所五〜六軒で組合をつくり田植えをするが、田植え初めには

と冬籠りの泥鰌が必ずいた。捕った泥鰌を瓶に入れ何ん匹捕ったよと仲間

間で自慢した。日差しも一段と明るさが増し雪も次第に解け道路も完全に乾く頃に、

自轉車屋では冬期間の自轉車修理廃品の「タンガリール」を子供たちに呉れた、子供たちは大喜びで「タンガリール」の真中に木の棒を入れ「タンガリール」の回転を流れるままに自由自在に回って遊んだものだ。

当時は自動車も通らず、たまに荷車が歩く程度だったので道路が乾いていると道路上で「ベースボール」が盛んに行われ、チームを組んで勝負を争った。私達が子供の頃に「ビダ」が流行した「ビダ」は一・五〜二ミリ位の厚紙を円形にした大きささまあるが、相手の「ビダ」を板の間や路上に置いて自分の「ビダ」を上から下に「力」の限り落し「ビダ」の風圧で相手の「ビダ」を裏返しにすると「ビダ」を一枚取るに良いから成る可く大きな「ビダ」を出して、ひっくり返えられない様にするが上手な人は何枚でも取るから、取られた人は「ビダ」が無くなり、また店から大きな「ビダ」を買ってきて対抗するが最後には上手な人に全部を取られるから悔しいこともある。

この頃には季節風が強いので風を利用して大人も小供も凧揚げが盛んで、一枚凧から四枚凧迄揚げる人もあった。

明治から大正にかけて嘉瀬では綱引きが盛んだったと言う。日一日と暖さが見えてくるので一日の仕事が終り、夕飯が済むと若衆達は急いで綱引きの練習に専念した。

村を半分は大堰から西・東と分けたが昔は年占ひの意味だった。一本の綱を雌、雄の蛇体と見たて西が勝ちと雄の勝ち、東が勝ちと雌の勝ち

赤飯を炊き、身欠鯨やお酒を神棚に供え、田の水口にもお酒を供え又、苗取りや男衆には酒や身欠鯨、干鰯、其の他の御馳走が出され、田植女も同様で一日に五回位はご飯を喰べたが、四つんばいの仕事なので男も女も体にこたえた。又、乳児のある家ではお昼近くになると母親の乳を呑ませる為に十二〜三歳の子供が田圃に乳児を背負って行き吞ませた。

帰りには堰から「ガジギ（マコモ）」を取り田圃の畦から「ベゴチカ（方言語）」や野面からは「トジナ（クマヤナギ）」を取り仲間にくれたが子供達は喜んで、「ガジギ」を食べ「ベゴチカ」や「トジナ」を口に塗り髭を生やして喜んだ。

忙しかった田植が終わる二〜三日前に若衆等は虫祭りの日取りと若物頭を決める。若者頭の家の前や村の八幡宮境内、村はづれの田圃の畦道に集って朝早くより遠くから、近くから「ドン ドン」と太鼓の響きが聞えて来る。娯楽の乏しかった昔の若者達には最大の楽しみである。

又、虫送りには若衆等は藁で大きな蛇体の虫を作って担いで村中を廻って歩く。村を一巡したあと村境の大木の枝に掛け稲が成育する間に害虫に襲われないように村から害虫を一掃しようと言う一種の「呪い」であると思う。虫送りの仮装行列は村の真中を西と東に二手に別れ、奴踊りを中心に棒振り、大行列、騎馬などの行列が続き殿様には若者頭がなるしきたりで、太鼓、笛、鉦の鳴り物入りで威勢の良い囃しが加わり賑やかであった。

又、毎戸の人々は門口でお酒や金一封を仮装行列に献上、この日ばかりは「五月御免で駐在所や役場も目を瞑ったと言うが、若衆等は最後に八幡宮境内に集り酔った威勢で跳躍し、日頃の口の煩い奴や普段憎しみを感じて居る人に挑発し、最後には喧嘩を仕掛け血を流す事もあると言う。

虫送りやさなぶりが終ると田の草取りは稲の成育を良くする為の雑草取りだが田植同様に四つんばいの激しい重労働だ。仕事の良い人でも一日に一反歩弱の田の草取りだ。土用近くになると沸く様に暑くなった日中での田の草取りは汗をだらだら流し、堰の水に入って冷水を取るが汗と泥にまみれて四つんばいの仕事だから日射病になる人もあり、三番除草の頃には稲が伸びるので稲の葉先で目を突き医者には掛る人もある。

話は前に戻るが、春先から夏に変るの間、山採取が嘉瀬山や喜良市山にワラビ、フキ、アザミ、コゴミ、ゼンマイ、ミズ(ウワバミ草)、タケノコなどの採取で賑わった。春先には田のセリ、アサドキ(アサツキ)などは子供達が土手に採るに行き、味噌と鍋を準備して、堰から田螺を取り土手でアサドキと一緒に煮て食べた。初夏には羽毛が生えればかりの子燕が飛び方を練習しているのか電線に止っているのが目に見える。又、雨が降ると新川の増水の濁りで鮎や鮒が上り持網を持って出掛ける人が多いが昔は何処の田堰でも雑魚が沢山取れた。貧しかった昔の人々には雑魚は貴重なタンパク源だった。

五月(旧暦)は宵宮で、昔はお宮やお寺を中心に生活の規律を保ったが、明治以前は神仏混淆でお寺でも宵宮があったと言う。宵宮は朝から太鼓が鳴り賑りが立ち出店が並び子供等を浮き立たせる。

宮の入口には日が暮れると絵燈籠に灯が入り、祭りには「ストギ」を焼いて神仏に供える。宮の境内には花火、綿飴、金魚すくいや子供の玩具店が並び母親が子供と一緒に「金魚すくい」やおでんを買う姿が見受けられた。昔は「カーバイト」の火で明りを灯し臭気がしたが、郷愁を誘った。

宵宮の頃には蛍が飛び、子供達は蛍狩りに歩き「蛍来い」と呼び、採

十三日の墓参りには大根のあられや水、茶、酒などを供え、家族揃って出掛ける。お寺の境内は線香の煙でむせかえるがお盆の墓参を法界に行くと言う。古くから「盆の十六日、地獄の釜の蓋もあく」と言った。

昔は盆休みの最大の楽しみは盆踊りで本来は盆に招かれてくる精霊を慰める仏教的な謂れだと言う。特に前町の盆踊りは揃いの浴衣に花笠を被った踊りの列が華麗な波の様に一〇〇米位の輪になり夜明け迄踊り続き、沿道を埋める見物人達を沸かせる。盆踊りは一週間も続き、お盆も終り、愈々お山参詣だ。其の年の収穫を感謝する行事だが、昔の人々はお山は神が住む山であり心の寄りどころとして信仰の対象であった。お山は稲作の豊凶を司るものと思ひ、残雪の形、雪の遅速、山の色の变化、雪の動きなどで天候の変化を予知した。若衆等は朔日山かけて来光を拜むと言ったが、この間に八幡宮境内に籠り、一週間は家に帰らず魚や肉類は一切食べず、お宮の前にある小田川でメ縄を張り水垢離を取り、「サイギ サイギ」の唱文をとない、笛、太鼓の囃しで昼夜数回水垢離を取る。其れが終ると白装束を身に付け、赤、青、白と、其の人の力量に依じた三米(五米もある御幣)を持ち、村や近くの氏神や親類を登山囃子でサイギ、サイギの掛声も勇ましく回るが、立ち寄られた親類や知己では精進料理で酒を振舞う。

参詣者は朔日山を目ざし百沢に行く。晦日の晩は百沢に宿を取り、登山は夜中から出発、朝には御来光を迎え拜む。又下山は「良い山かけた、バタラ、バタラ、バタラヨ。」と踊りながら下山する。百沢でお面やお守りをお土産に沢山買い帰途につく。村の親類縁者達は村境迄出迎えるが、一行は八幡宮に集り無事参詣した事を八幡様に報告し、酒盛りをして祝った。旧八月十五日を中心に、上の猿賀、下の猿賀神社祭がある。嘉瀬の人々

った蛍を籠に入れ家に帰って蚊帳の中に入れ、青白く光を放ちながら飛ぶ蛍を眺めていると遂に眠りに付く。

嘉瀬には昔前町の湯、熱の湯、鶴の湯と大きな銭湯屋が三軒あった。土用の丑湯になると何処の銭湯屋も芋を洗う様な人々が賑わい、湯も「どろどろ」に汚れるが汚れる程に湯の効めがあるとされた。

立秋を告げると昼は暑さが残るが朝夕は涼しさが肌に感じる。この頃には「ネプタ」の行事がある。「ネプタにはネプタイ(眠い)」のを夏の睡魔から取り除き流す為の行事だと言われるが、昔は嘉瀬でもネプタが盛んで村を西側と東側の二ツに分かれ、村中を回り賑やかだった。最後には八幡宮境内にネプタ行列が集り、酔った勢いで西組と東組が喧嘩になり喧嘩に勝った組がネプタの勝ちとされた。旧暦七月七日にはネプタを流したこの日は「なのか日」で鍛冶町の薬師神社では早朝から太鼓が鳴り、賑りや旗が立ち、出店が数軒立並ぶ。夕方には絵燈籠に灯をとすと暗闇の宙に浮かぶ絵燈籠は夢幻を誘う。七夕祭りには何処の家でも赤飯をつくり祝うが、子供達は七回赤飯を食べ、七回水浴びをすると水難に合わないと言われた。昔は水難に合うのは河童のせいだと信じた。七夕祭りに井戸を浚渫した(井戸底の泥をさらう)。農家は今も仕来たりを重んじている。

盂蘭盆会を嘉瀬では盆、お盆と言う。祖先を祀る行事であるが、十三日の夕方に墓参りをする。墓や仏壇にはガジギ(マコモ)で編んだコモ、蓮の葉、茄子、胡瓜、お膳などを供える。茄子、胡瓜に割箸の足を刺してつくる牛や馬は精霊が十億土のあの世から疲れ果て、帰るのだから牛や馬に乗って来るのだと言う。仏壇には燈籠菓子が吊されるが精霊に貴方の家は此処だよ、と知らせしているのだ。

の大半は下の猿賀神社祭り(現中里町富野)に詣でるが、この日は嘉瀬からも大賑や大小の御幣が奉納され、相撲大会、民謡大会、盆踊大会で人垣が出来る程で、猿賀神社祭は農民を主体とした祭りである。八月十五日は仲秋の名月で一年中で一番美しい満月である。この日は何処の家でもススキ、団子、リンゴ、ブドウなどの果物を供え昇ってくる満月を拜み、十五夜の月に「うさぎ」が杵で餅を搗えて居る形を子供達と語り合う。

昔は大抵の農家でサルケ(泥炭)を燃料に焚えた。サルケは葦や萱や其の他の湿原植物が堆積し、長年の間に炭化作用した物と言う。嘉瀬では清久溜池や「シンカイ(新開)の田などでお盆が終る頃に「カナベラ(四角なスコップ)でレンガ(煉瓦)の大きさに切って掘り出し一週間(十五日位)乾かす。ある程度乾燥したら家まで運んで家の軒下の回りに積上げて、完全に乾かした頃に焚くがサルケは火力が強く耿々と燃え、炊事や魚を焼くのはとても良く、又子供達はサルケで薯を焼いて食べた。

サルケを焚くと異様な臭気が漂い家中や着物にサルケの臭いが付いて離れない。サルケは囲炉裏で焚くので煙がこもって目をあけられない程だった。余談だが、太宰治の「津軽」の一編に斜陽館に子守役として奉公していた「タケ」が、生れ育った家に遊びに行き斜陽館に帰ると「タケ」の着ている着物がサルケの異様な臭えがするので、「其の後タケの生家には遊びにやらなかったという件(くだり)がある。昔の農家は燃料にまで窮し、サルケ、葉、乾草などを焚いて暖を取ったと言うが全く哀れで悲しい現実であった。

昔の嘉瀬には獅子踊りが数組あったと言う。獅子舞は雄獅子二匹と雌獅子一匹がオガシコ(道化役)と一緒に踊る。